

自分の住んでいる町をエコビレッジに！

地域密着型の新しいエコ市民運動 ランジション・タウンの取り組み

2005年にイギリスの小さな町から始まった、自分の町で持続可能な暮らしを可能にする運動、ランジション・タウン。またたく間に世界中に広がったこのムーブメントは、日本でも活動が始まっています。

その中心人物であるランジション・ジャパンの榎本英剛さんに、世界と日本の活動の現状を語っていただきました。

お話し◎榎本英剛さん(ランジション・ジャパン代表) 写真提供◎吉田俊郎さん、小林恵里奈さん、丹羽順子さん

生き方を見直す、世界的な市民運動

ランジション・タウンは、2005年秋、イギリス南部デボン州トットネスという町で始まりました。それは、石油ピークと気候変動という、世界を直撃している危機を受けて、市民の創意工夫、及び地域の資源を最大限に活用しながら「脱石油型社会へ移行していくための草の根運動」です。創始者のロブ・ホプキンスさんは元パーマカルチャーや自然建築の先生であり、ランジション・タウンの思想の端々にパーマカルチャーの考えが反映されています。

私は元々、日本でコーチング(人や組織の可能性を引き出すためのコミュニケーション手法)の普及を行っていましたが、この手法でクライアント個人の力を引き出していくことに限界を感じていました。そして、日本に住む人たち全体の力を引き出せるような社会の仕組みと

は一体どのようなものか考えている時期に、エコビレッジに興味を持ちました。エネルギーや食べ物を自給自足する持続可能な生活の営みが、現代社会の様々な依存から脱する方法を提示しているように感じたのです。

それを体感したくて、2004年にエコビレッジ・トレーニングを受けたのをきっかけに、3年ほどフィンドホーンに滞在しました。しかしながら、石油ピークや気候変動の問題を考えた時に、エコビレッジを二から日本で作ることの有効性に疑問を感じました。そんな中、既存のコミュニティや市町村をエコビレッジ化する手法はないものかと考えていた矢先に、ランジション・タウン運動を知ったのです。2007年秋、ロンドンで開かれたあるカンファレンスでロブの話聞き、感銘を受けた私は、パーマカルチャーを

一緒に学んだ仲間数人に「これを日本でやろう」と声をかけました。その後帰国し、2008年に任意団体「ランジション・ジャパン」を立ち上げ、早ければもうすぐNPO法人として認証されます。

私がなぜランジション・タウンに惹かれたかという点、「その地域にすでにある資源に着目し、それらが持つ可能性や特質を最大限に引き出す」という思想が、個人が持つ可能性を引き出すコーチングと相通じると感じたからです。

エコビレッジは、自分たちが思い描く持続可能で地球に優しい暮らしを实践しようと思った人たちが、既存の社会的枠組みからは離れたところでコミュニティを形成しようとするという意味で、ある種、理想主義的だと思います。それに対し、ランジション・タウンは現実主義的です。一から理想郷を作るのではなく、今あるものをどうやってエコビレッジ化し、持続可能なものにしていくかという考え方なのです。



榎本英剛◎えのもとひでたけ/約10年前のアメリカ留学中コーチングに出会い、帰国後コーチングの普及に努める。2004年、フィンドホーンにてエコビレッジ・トレーニングを受けるとともに日本でパーマカルチャーを学び、約3年間、家族とともにフィンドホーンに移り住む。イギリス在住中、ランジション・タウンに出会い、現在は仲間とともにランジション・ジャパンを設立。日本における普及をめざしている。

比較的目的に見えやすいエコビレッジの活動に対し、ランジション・タウンの活動は、特に初期の頃、問題意識を高めたり、関連団体と連携を図ったりなど、水面下で行われることが多いので、なかなか目に見えにくいところがあります。

また、エコビレッジには、「ランジション(移行)した社会がどのようなものかを体感でき、石油ピーク後の持続可能な暮らしを目に見える形で提示する」というデモンストレーション・センター的な役割の他、「再生可能エネルギーや地

自分の住む地域をトランジション・タウンにするための

12のステップ

第1ステップ 最初の立ち上げグループを結成しよう

- まずは想いを持った仲間を同じ地域で見つけるところからすべてが始まる
- このグループは、第5ステップまでの初期段階において中心的な役割を果たす
- 同じメンバーがずっと続けると変なこだわりやエゴが出てくるため、解散時期をあらかじめ決めておく

第2ステップ 問題意識を共有しよう

- 特に、ピークオイルと気候変動という「双子の問題」について問題意識を共有する
- 映画の上映会や講演、その他のイベントを定期的を実施する
- 参加した人たちが同士によるディスカッションの時間も設けることが肝要

第3ステップ 関連団体と連携しよう

- その地域で同様の理念やビジョンを掲げてすでに活動している他の団体と協力を模索する
- 地元の企業や商工会、学校なども連携する
- その他、その地域に存在する様々な資源を発掘し、それらを有機的につなげる

第4ステップ 大々的にお披露目をしよう

- しっかりと土台をつくったところで、地域全体を巻き込む活動として正式に立ち上げる
- 時期としては、最初の立ち上げグループ結成から半年ないし1年くらいが目安
- 参加者にとって有用で、やる気が湧いてくるようなイベントにすることが肝要

第5ステップ テーマ別のグループを形成しよう

- 食やエネルギー、経済や教育などテーマ別にグループを結成する
- 定期的に会合を開き、最終的にはエネルギー消費削減行動計画に盛り込む提案を作成する
- この段階で最初の立ち上げグループは解散し、各テーマ別グループの代表者からなる運営グループを新たに結成

第6ステップ 主体性や創造性を引き出す話し合いの場をつくらう

- 参加者の主体性や創造性を引き出すミーティング手法としてオープン・スペースやワールド・カフェなどを積極的に活用する
- ミーティングの内容を記録し、他のグループにも公開する

第7ステップ 目に見える事例をつくらう

- どんなに小さなものでも、目に見えるものをつくることで説得力が増す
- 一緒に身体を動かすことでコミュニティ意識が芽生える
- 話し合いが苦手な人も参加しやすい

第8ステップ 基本的な技能の再習得を促進しよう

- 農業、園芸、料理、建築、織物、修理、家庭医学、自家発電など失われた基本的技能を身につけるための講座を提供する
- 地域レベルだけでなく、個人レベルでも変化に耐えうる力を養う

第9ステップ 先達から学ぼう

- 石油時代以前、地域の暮らしがどうであったかを知っている年配者は地域の大切な資源
- 彼らからその地域に伝わる技術や歴史を直接教えてもらうのは今が最後のチャンス
- 世代を超えたつながりをつくる

第10ステップ 行政機関との協働関係を築こう

- なるべく早い段階で、行政との良好な関係を築く
- イベントに招待したり、定期的に情報交換を行う
- 行政サイドで作成した地域開発計画などを入手し、参照する

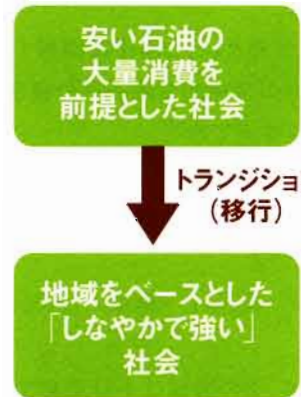
第11ステップ エネルギー消費削減行動計画をつくらう

- 地域資源マップの作成やレジリエンス指標の調査などを通じて、現状を把握する
- 15~20年後の地域ビジョンを作成し、そこから遡るようにして目標やスケジュールを設定する
- 各テーマ別グループからの提案を統合する

第12ステップ 流れに任せよう

- コミュニティの自発性や主体性に任せ、コントロールしようとしな
- その地域がトランジションするための「触媒」となる ●答えよりも問いを大切に

トランジション・タウンの目指す社会



地域の人たちが、その土地の資源を生かして共存する持続可能な暮らしへ

域通貨の利用などの実践的ノウハウを、既存の市町村に提供する」という基礎研究機能もあります。一方、トランジション・タウンには、エコビレッジが長年蓄積した技術・知識・経験をもっと広い範囲

で応用し、現場に生かす応用研究的な役割があります。現実には、この二者の連携は去年から強まってきたのです。例えば、フィンランドホーン近くのフォレスという町をトランジション・タウンにしようという動きが広まっています。それはフィンランドホーン関係者だけではなく一般の町民を巻き込んだもので、フィンランドホーンが持つているノウハウをできる限り使い、サポートをしようとしているのです。ここではエコビレッジとトランジション・タウンの相互協力があります。今後、他にもこのような動きが世界各国で起きてくることでしょう。

日本でも広がるトランジションの動き

現在、日本では、葉山町、藤野町（ともに神奈川県）、小金井市（東京都）の3つの町でトランジション・タウンの活動が始まっています。お互いの活動を報告するなど、緊密な連携が行われています。トランジション・ジャパンでは、今後各地で起きてくるであろうトランジションの動きをサポートすべく、情報共有できるような仕組みを作り、関連団体との連携を行いたいと思っています。私が住んでいる藤野町では、まず、地

元で高い問題意識を持った個人や団体に対して、トランジション運動についてのお話をさせていただいたり、小規模のプレゼンテーションをさせていただいたりといったことを地道にやりました。その中で、町役場の元幹部や地元出身の市議といった有力者にも支援していただけるようになり、徐々に活動の基盤ができてきました。地元をよく知ること重要な要素なので、地元の歴史や文化を知っている人の話を聞く場を

トランジション運動の特徴

- 石油ピークと気候変動という「双子の問題」に同時に対処し得る、根本的かつ包括的な解決策の提示をめざす
- 地域レベルに焦点を当てる
- 地域住民の主体性や創造性を引き出す
- その地域にすでに存在する資源を最大限活用し、それらを有機的につなげる
- 頭 (Head) ・ 心 (Heart) ・ 手 (Hands) の「3H」のバランスをとる
- よりよい未来を描き、その実現は十分可能であると信じ、楽しみながら取り組む



1月に行われたトランジション葉山の説明会で、森林活動をしているおじいさんから20歳の学生や主婦など、約60人が集まった。



2月に行われたトランジション藤野の定例会で、地元で生まれ育った人や最近引っ越してきたばかりの人も含め約40人が集まった。



トランジション運動が行われている葉山で石窯作りワークショップ&ピザパーティを開いた時の様子。東京と地元から約20名が集まった。



定期的開催する計画をしています。このようにトランジションは、その地域にあるリソース(資源)を生かす活動がメインになってくるのです。

また、現在進行中のプロジェクトに、「里山長屋暮らしプロジェクト」というものがあります。それは、庭がパーマカルチャーガーデンの長屋形式のエコハウスを、一棟の中に4世帯作るものです。これは、持続可能な暮らし方のモデル住宅として、来年初頭に完成する予定です。

この住宅を作る過程でも地元の人たちを巻き込んで、土作りや壁作りなどを学んでいただく機会を提供することを考えています。オープンにすること

で地元の人と繋がりを作れますし、その技術がわかる人を地元を増やしていくこともトランジションの活動のひとつです。また、建築資材も地元の素材を使い、地元の大工さんに仕事を頼み、できる部分は自分たちで行います。これは、「住」におけるトランジションのモデルケースになるでしょう。

トランジション・タウンが今までの環境運動や市民運動と異なる点は、「部分だけでなく全体を見る」とか「分断ではなく繋がりを作る」といったように、活動する人たちの意識のあり方を重視するところだと思います。例えば、ゴミ問題に取り組みむ人たちが活動に行き詰った時、ゴミという切り口だけでなく、教育や福祉といった他の問題と結び付けて考えることで突破口が開けることもあるでしょう。要するに、「木を見て森を見ず」ではなく、森の視点から個々の木を結び付けていくことが、この活動の大きな意義だと思うのです。

トランジション・タウンはイギリスで始まった運動ですが、地域主導という観点からすると、イギリスと日本のトランジションのあり方は当然変わってくると思います。日本のトランジションのあり方を見出し、それを世界に向けて情報発信していくことで、多様性も出てくるでしょう。

石油ピークや気候変動といった未曾有の問題に人類が対処するには、行動を変えるだけでは不十分で、意識を変えることが必要です。こうした「内なるトランジション」が起きた時、明るい未来が開けてくるでしょう。それには、変化の過程を楽しむことも含まれます。私がフインドホーンにいた時に聞いた言葉で、「楽しくなければ持続可能ではない」というものがあります。トランジション・タウンは頭文字がTTですが、もうひとつのTTとして、私たちは「楽しく繋がる」をモットーにしています。地域の人たちが楽しみながら繋がって、持続可能なまちづくりをしていく火付け役になれば、と思っています。

トランジション運動が目指すもの